

評価する側、される側

望月 聡

人間総合科学研究科講師

前号を手にした頃ちょうど、携帯電話を買い換える必要が生じ、カタログを眺めていた。そこには、機種ごとに特徴を紹介するページや、全機種を横並びにして機能を比較できる機能一覧のページがある。私はこれらを検討し、いずれかを選択したい。比較し、なんらかの判断をすること。ここで私は評価する側に立っている。それぞれの機種（製造会社）は評価される側として、独自性をアピールし、なおかつ共通の比較項目においてよりすぐれていることが目指されている。

前号の特集は研究評価であった。研究を評価すること自体に対する様々な意見が示され、また各組織における取り組みと現状、経験が紹介されていた。研究評価と一口に言っても、目的（何のため）・対象（個人／組織／大学全体；評価される期間）・方法（評価項目、評価基準、評価手順）・主体（自己評価／組織内評価／外部評価）など、評価

のしくみ自体が多種多様である。また、自らが評価される側に立つこともあれば評価する側に立つこともあり、いずれであっても、その両者となりうる個人・組織には多様性や独自性が存在する。さらに大学教員であることで、教育はもちろん、組織運営への貢献、学外の社会への貢献も求められており、これらのバランスという問題もある。研究評価が「困難な作業」であり、「多様な・多面的な・包括的な評価が求められる」と繰り返し述べられているのは当然であろう。

評価自体の必要性は認めよう。評価される側としては、これらすべての活動にバランス良く力を注ぎ成果を残すべく努力し（「機能一覧」で負けぬよう）、さらに独自性をアピールしていくしかない、いかなる評価にも応えうるよう。評価する側としては、目的に応じた適切な項目探し・基準作り、評価方法とそのプロセスの客観化・透明化の努力をするしかない。

機能以外の要因も含め、多面的かつ包括的な評価の結果（評価プロセスの完全な開示は困難である）、最終的に私はある機種を選択し、現在使用している。きっと私は今後、携帯電話を見るたびに研究評価を考えてしまうだろう。

（もちつき さとし／神経心理学）